ぼくら、２０世紀の子供たち（1993）

NOUS, LES ENFANTS DU XXEME SIECLE
WE, THE CHILDREN OF THE 20TH CENTURY

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ドキュメンタリー
製作国 ロシア／フランス
色彩 Color
時間 84分
初公開日 1995/03/18
公開情報 ユーロスペース
リバイバル 2009/11/07［エスパース・サロウ］

【解説】

ブニュエルが本作を遡る約半世紀前に、第二次大戦下のメキシコのストリート・チルドレンを描くことで、世界の南北問題を照らし出したように、旧体制崩壊後のロシアのそうした子供たちをみつめて、カネフスキーは必ずしも絶望にまみれない、２１世紀への真摯なビジョンを探ろうとしている。

サンクト・ペテルブルグ。作者は１０歳にも満たない少年たちにその“犯罪歴”を問いただす。最初は警戒していた彼らだが、一人が口を開くと堰を切ったように告白が続き、あどけない表情からは想像もつかない言葉が並ぶ……。廃ビルをねぐらにする一団は残飯を食べており、栄養状態が悪そうだ。１０歳までの子供らの施設。坊主頭の少年たちの単調な告解を、一杯のウォッカのために売春を強要されたーーという少女の叫びがつんざく。１１～１５歳の施設。木の綿毛が舞う夏の日、バラライカで美しい旋律を弾く少年たち。１６～１８歳の鑑別所。母親も刑務所に入っていると語る少年。女子刑務所に子殺しの女囚を訪ねると、今は改心したという彼女は里子に出した下の娘を抱いていた。鑑別所の面会牢に入ってくる殺人犯の少年少女たち。続いて入ってきた少年を見て作者は絶句する。「動くな、死ね、甦れ！」「ひとりで生きる」の主役のナザーロフなのだ。改めて彼の暗い幼年期の話を聴き、また映画を撮ろうと励ます作者。河の桟橋で少年たちのボスに会う。現代を“２０世紀の秋”と表わす少年だ。再びナザーロフを訪ねる作者。今度は共演の少女ドルカーロワを連れて……。固く抱き合う二人。そして「動くな、死ね、甦れ！」の最後の方で唄った歌を共に口ずさむ。モスクワ、赤の広場。恐喝をする少年に、５０００ルーブルやれば自分の父親を殺すか、と尋ねる作者。産院を出る乳児と、新生児たちのスケッチのプロローグとエピローグに挿入された、このドキュメンタリーはこれまでの涙も凍るようなカネフスキー作品と違って、熱いもののこみ上げるのに任す他ない衝撃作。降参である。

【クレジット】

監督	ヴィターリー・カネフスキー	Vitali Kanevsky
脚本	ヴィターリー・カネフスキー	Vitali Kanevsky
	ヴァルヴァラ・クラシルコワ	Varvara Krassilnilova
音楽	クロード・ヴィラン	
出演	パーヴェル・ナザーロフ	Pavel Nazarov
	ディナーラ・ドルカーロワ	Dinara Drukarova

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.